

第210回（令和5年5月28日施行）

2級商業簿記

第1問

本問は、基本的な取引における仕訳の理解を問うものである。

1. 前期末に見越し計上した受取利息は、当期に利息を受け取ったとき、前期分と当期分を区別しないで、全額を受取利息勘定に記入できるように、受取利息勘定の借方と未収利息勘定の貸方に再振替記入を行う。
2. 商品を仕入れた際、小切手を振り出したが、当座預金勘定残高が不足する金額を当座借越勘定で処理する必要がある。
3. 他店振り出しの約束手形を裏書譲渡されたときは、手形債権が増加するため、受取手形勘定の借方に記入する。
4. すでに支払っている金額は、「建設仮勘定」の借方に計上してある。引き渡しを受けたとき、建物勘定に計上するとともに、建設仮勘定に計上してある金額を取り崩し、残額を未払金とする。
5. 配当金を支払ったときは、株主総会の決議により計上してある未払配当金を減額する。
6. 固定資産税を納付したときは、租税公課勘定の借方に記入する。
7. 支店を開設した際の簿記処理を問うている。本問では支店の仕訳が問われているので、現金勘定、仕入勘定および備品勘定の借方と本店勘定の貸方に記入する。

第2問

本問は、会計学でいう貸借対照表等式および損益計算書の利益計算式が、簿記ではどのように現れるか、とくに当期純利益（当期純損失）の計算構造、ならびに、管理上必要な売上総利益をどのように算出するかを問うものである。

本問を通じて、仕入勘定で売上原価が計算されること、収益費用に関する勘定は損益勘定に振り替えられること、株式会社の会計では損益勘定残高は繰越利益剰余金勘定に振り替えることなど簿記記録の基本的な仕組みを確認して欲しい。

解答にあたっては、売上総利益は、売上勘定残高から仕入勘定残高を控除することで計算できる。また、仕入勘定と売上勘定の残高を損益勘定へ振り替えらうとすることで、損益勘定残高より当期純利益（当期純損失）を計算する。この損益勘定残高は、繰越利益剰余金勘定に振り替えられる。なお、資本金（前期繰越）は、資本金（次期繰越）に増資の金額を減算して計算する。

第3問

本問は、商品有高帳の理解と商品販売益（粗利益）をどのように算出するかを問うもので

ある。移動平均法は単価の異なる商品を受け入れたそのつど、平均単価を求め、これを払出単価とする方法である。商品有高帳は、受入欄、払出欄ともに原価で記録する。平均単価は、受入価額と受入直前の残高の合計を受入数量と残高数量の合計で除して求める。仕入商品の返品（仕入戻し）は、払出欄に記入するか、または受入欄にマイナス記入（赤記）し、残高欄の数量と金額を減額して、再度平均単価を求める。販売商品の返品（売上戻り）は、受入欄に記入するか、または払出欄にマイナス記入（赤記）する。払出直後の売上戻りの場合、平均単価は変わらない。純売上高は、総売上高から返品等の金額を控除して算出される。売上原価は、商品有高帳で払出数量と単価を乗じて求める。その際、上記の仕入戻しや売上戻りの金額を調整することを忘れてはならない。

第4問

本問は、売上原価対立法の簿記処理、3伝票制における伝票の記入方法および仕訳集計表の作成を問うものである。

売上原価対立法では、商品を仕入れた際に原価で商品勘定の借方に記入する。また、商品を売り上げたときは、売価で売上勘定の貸方に記入するとともに、原価で売上原価勘定の借方と商品勘定の貸方に記入する。

入金伝票には借方が現金となる取引が、相手勘定科目のみを記入し起票される。また、出金伝票には貸方が現金となる取引が、相手勘定科目のみを記入し起票される。振替伝票には、入出金以外の取引を借方、貸方に記入し起票される。

入金伝票、出金伝票は省略された相手勘定科目に注意して、また振替伝票は借方、貸方の勘定科目に注意して、仕訳集計表に集計する。

第5問

本問は、付記事項と決算整理事項に基づいて記録の修正を行った上で、損益計算書と貸借対照表を精算表上で作成する方法を問うものである。

- ① 付記事項と決算整理事項を、期中に記録がある勘定は金額のみ、記録がない勘定は勘定科目を記入した上で整理記入欄に貸借記入する。
- ② 収益・費用の勘定に、整理記入欄の修正額を加減し、損益計算書欄に書き移す。
- ③ 資産・負債・純資産（資本）の勘定に、整理記入欄の修正額を加減し、貸借対照表欄に書き移す。
- ④ 損益計算書欄の合計額を計算し、貸方の収益合計が大きい場合は当期純利益が生じているから貸借差額を借方に記入し、合計額で計算結果を照合する。当期純利益は純資産（資本）の増加であるから貸借対照表欄の貸方に書き移し、貸借対照表欄の合計額の一致によって当期純利益を検証する。